

静岡新聞 2023 年 9 月 20 日 付

論壇

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

中国経済の動向が世界経済の大きなリスクとなつてい
る。世界経済の18%を占める
存在であるので、中国経済で
景気が大きく失速すれば、世
界への影響は大きい。中国経
済のどこが問題なのだろう
か。

中国経済が破竹の成長を始
めたのは、1978年に、時の
中国トップの鄧小平が改革開
放路線を進めてからだ。それ
から40年近くの間、中国は非
常に高い成長率を維持してき
た。一つの国がこれほど長期
間にわたってこれだけの高い
成長率を続けた事例はない。
その結果、中国は世界第2位
の経済規模の国に成長した。

このような奇跡とも言つべ
き成長は、経済のグローバル
化なしには考えられない。海
外から膨大な額の投資が中国
に入ってきて、中国から巨額
の輸出が出て行った。その中

経済の「双循環」目指す中国

国の輸出の中には、外資系企
業による輸出の割合も大きか
った。

ただ、こうした輸出と対内
直接投資を梃子とした高成長
には限界があった。中国経済
が小さい時期にはいくら輸出
しても海外にはその輸出を受
け入れる余地があった。しか
し、中国経済の規模が大き
なる中で、それでも輸出を急
拡大することは不可能であ
る。中国という巨大な鯨が狭
い池の中で暴れるような状況
だ。

そこで、中国としても、内
需(国内需要)を梃子とした
成長にシフトしていかざるを
得ない。米中の経済対立の動
きも、中国経済を外需一辺倒
から内需重視に変える動きを
後押しした。2020年、習
近平主席は「国内大循環を主
体として、国内外の双循環が
互いに促進する新しい経済発
展モデルを旨とす」と発言し
て注目された。以来、中国経
済の専門家からはしばしば双
循環という言葉が出てくる
が、二つの循環の中で国内大
循環、すなわち内需主導の成
長に力点があることは明らか
だ。

国内でインフラの整備に投
資をし、ハイテク産業の育成
に力を入れ、こうした流れで
国内の所得が増えていけば消

費需要も増えるので成長にも
繋がるはずだ。外需のみを頼
りにすることに限界を感じる
中国が、内需に舵を切るのは
当然のことだろう。問題は、内
需依存でこれまでと同じよう
な高成長を維持することは容
易ではないということだ。外
需だからこそできた驚異的な
成長は、内需中心では難しい。

中国でいま大きな問題にな
っている不動産バブルの問題
は、内需中心の経済運営がう
まくいっていないことを示し
ている。内需拡大をあまりに
急ぎすぎると不動産市場など
でバブルが起きる。これはか
つて日本も経験したことだ。
バブルが崩壊して不良債権問
題が深刻化すれば、景気低迷
は長期化する。日本のこうし
た経験もあり、今の中国の状
況は「中国経済の日本化」と
呼ばれている。

中国も日本の過去の失敗を
深く学んでいる。不動産バブ
ルが崩壊してもそれが経済低
迷の長期化に繋がらないよう
な手を打ってやるだろう。た
だ、内需に重点を移した中国
経済のあるべき姿は、高い成
長率の維持を狙うのではな
く、安定的な成長に軟着陸す
ることである。難しい国際政
治経済の環境の中で中国がそ
うした安定成長路線に移行で
きるのかは分からない。